

(1)保存地区の概要

地 区 名	大田市大森銀山
種 別	鉱山町・陣屋町
選定年月日	昭和62年12月5日
面 積	約162.7ヘクタール
特 徴	大田市大森銀山伝統的建造物群保存地区は、幕府直轄地約4万8千石、約150カ村の中心の町であった。銀山は14世紀初めに発見されたと伝えられ、産銀量は17世紀初頭にピークをむかえ海外にも輸出された。町並みは銀山川沿いの谷間に延びる約2.8キロの範囲で、代官所跡や郷宿、武家屋敷、商家などが現存し、背後の山裾には社寺や墓地、石切り場なども残され、鉱山町の歴史的景観を良好に伝えている。



地 区 名	大田市温泉津
種 別	港町・温泉町
選定年月日	平成16年7月6日
面 積	約36.6ヘクタール
特 徴	大田市温泉津伝統的建造物群保存地区は、天然の温泉が湧き出る港町で、中世より石見銀山の外港として発展してきた。狭隘な谷を切り開いた約800メートルの町並みは、近世の地割をよく残している。江戸末期から昭和初期にかけて建てられた町屋を中心に、旅館や社寺などの多様な建造物が並んでいる。それらが周囲の海や山とともに、港町・温泉町の景観を形成している。



(2)保存地区のあゆみ

- 昭和61年(1986) 旧大田市大森銀山地区 伝統的建造物群保存対策調査を実施
- 昭和62年(1987) 旧大田市大森・銀山地区 重要伝統的建造物群保存地区に選定
- 平成 6年(1996) 旧大田市大森銀山地区 防災施設整備(～平成8年)
- 平成 9年(1997) 旧温泉津町温泉津地区 伝統的建造物群保存対策調査を実施(～10年)
- 平成13年(2001) 重文熊谷家住宅保存修理開始(～平成17年)
- 平成16年(2004) 旧温泉津町温泉津地区 重要伝統的建造物群保存地区に選定
- 平成17年(2005) 市町合併により新「大田市」誕生
- 平成18年(2006) 大森銀山地区 無電柱化事業(～平成21年)
- 平成18年(2006) 重文熊谷家住宅公開活用スタート
- 平成19年(2007) 大森銀山地区 保存範囲拡大
- 平成21年(2009) 温泉津地区 保存範囲拡大
- 平成24年(2012) 温泉津地区 保存対策調査(防災計画策定)
- 平成26年(2014) 温泉津地区 防災事業スタート(～平成31年)
- 平成27年(2015) 伝建制度40周年 文化庁長官より、大森町文化財保存会に感謝状を授与
- 平成29年(2017) 大森銀山地区重伝建選定30周年
- 令和 6年(2024) 温泉津地区重伝建選定20周年

(3)保存地区の保存と整備

◆大森銀山地区

修理・修景の実績(昭和63年～)

修理162件 修景59件

防災施設整備(消火栓整備)(平成6～8年)



無電柱化前



無電柱化後

◆温泉津地区

修理・修景実績(平成17年～)

修理46件 修景17件

防災施設整備(平成26～令和元年)



消火栓(温泉津地区)



修景前



修景後

(4) 保存地区の活用とまちづくり

【大森銀山地区】

- ・地元企業による空家改修と定住促進(計60棟以上)
- ・飲食店、サテライトオフィス等の出店
- ・町並みガイドや宿泊施設の整備
- ・公開施設の整備(重要文化財熊谷家住宅等)
- ・地区内の電動カートの運行(グリーンスローモビリティ)
- ・人口減抑制(H23以降人口350人台を概ね維持)
- ・出生数の増加に伴う保育園・放課後児童クラブの施設充実



島根県立大学サテライトキャンパス
「まちなかライブラリ」
(中村ブレイスと連携)



重文熊谷家住宅の活用
地元小学生の石見銀山学
習と「かまど体験」



電動カートの運行



伝建物を活用した
宿泊施設(市史跡)



保育園と放課後児童クラブ(国史跡建造物)



放課後児童クラブ



保育園遊戯棟(新築修景)

【温泉津地区】

- ・町並みの一角や空き店舗を利用したイベント開催
- ・地区内の神社で毎週末開催される夜神楽公演
- ・民泊などの宿泊施設の増加



空家を活用した宿泊施設
シェアキッチン



地区内の神社で行う夜神楽
(毎週土曜日)

(5)住民等の取り組み

	大森銀山地区	温泉津地区
地域の活動	大森町は昭和29年に自治会全戸が加入する大森町文化財保存会を結成し、石見銀山遺跡や町並みの保全を40年にわたり行っています。石見銀山遺跡の世界遺産登録に際しては、賑わいと穏やかさの共存を目指す「大森町住民憲章」を制定し、自主的な出店マナーや交通規制により、魅力ある町づくりを一丸となって行っています。  保存会による 清掃活動	地区内の組織(株式会社WATOWA)が中心となり、温泉津町における100年先を見据え、「この町は何を大切にしてきたのか」「何を遺し、何を築いていくのか」という地域の未来ビジョンを共有するための「温泉津100年会議」を開催。さらに歴史的資源である空き家・空き旅館の調査などを通じて、今後の地域経営・観光施策を支える判断基準と体制の整理を行った。  100 温泉津 100年会議 地域住民による「温泉津100年会議」の風景 (西楽寺本堂)
技術者・技能者による取り組み	市内外の職人や建築士が参加する「石見伝統建築文化研究会(ITAC)」を結成し、保存修理等を通じた大工や左官技術の向上と継承、保存地区に限らず歴史建築物の保存に向けた現状把握と調査を行っています。	
保存地区を支える人々の努力	地元企業の取り組み 空家改修を積極的に行い、地区内の企業(中村ブレイス・群言堂)が社員寮や若者賃貸住宅、店舗として活用し、定住促進を行っている。(地区内改修約60件)	地元住民の取り組み 温泉津温泉を核とする町並みの活性化に向け、温泉旅館・店舗などの事業者が中心になり、朝市、賑わい創出のためのイベント開催、空き家情報の収集と若者の移住定住を積極的に行っている。